

デッチアゲに思う

辰野事件無罪判決のニュースを聞いた。勝ったというが、そうではない。漸く二〇年前の状況にもどったのじゃないか。メーデー事件にしても、長年被告席におかれた人々の刻苦は、一体誰がどうやって償ってくれるのか。時は金なりという。だが失われた時間は、いかに巨万の財宝を積んでも再生産する事はできないのだ。改めて国家権力に対する憤り憎しみを覚えぬ者がいるだろうか。福島事件や大逆事件の昔から、政府のデッチアゲ陰謀は限りがない。……

我々は日常生活で二四時間アリバイを持つ事は不可能だ。半年前の某日某時、どうしていたかを思い出す事さえ困難だ。ここにデッチアゲの可能性が生じる。

この数年来官犬につきまとわれた事のない非力小心な私の所へ、過般朝霞の自衛隊員殺し事件の翌日、朝霞署の犬がやってきた。前夜どこで何をしていたかという。ウチで寝ていたというほかないじゃないか。そして再び感じたのだ。奴らはデッチアゲようと思えば何でもできるのだ。時々、アタマのオカシナ人間が訪ねてくる。私は一応は犬ではないかと疑ってかかるようになった。

ハギシン

それにしても不愉快なのは電話だ。反戦市民運動をしている知人宅では、明らかに盗聴されているというが、私の所へは何かデモや集会がある時は、大抵私の行先を問合せてくるという。私は朝六時すぎには出勤するから当然家人が応待する。帰宅後話を聞くが全く心当りのない名前だ。それと二年位前から、講談社第一編集部と称する奴から、住所・氏名・勤め先の確認の電話がかかってくる。勤め先にもかけてきた。講談社へ問合せたら、そんな事をするセクシオンは全くないという。公安だからCIDだから知らぬが、気のきかない事をするものだ。電話では相手がどんな奴でどこからかけているのか解らないから、胸倉つかんでブンナグル事もできない。然し逆に、アリバイを確認してくれているのだと思えば、カタジケナイというべきだろうか。

(72・12・3)

官権のフレイムアップ粉砕

去る八月二六日未明 I・T なる青年が上野派出所を襲撃し、当直中の警官を登山ナイフで負傷させた後、自殺を計った事件を、無政府主義研究会と関連づけ、凡ゆる報道機関によりセンセーショナルに報道させたのだが、事実は明らかに周密に練られた官権のフレイムアップだ。

I・T は我々無政府主義研究会のメンバーであった事は一度もないし、我々の主催する一切の集会・研究活動の場にも参加した事はない。更にマスコミが報道したように一緒にデモやその他の斗争を共有した事などは一度もない。当然ながら御用新聞がわめきたてたような中心的活動家などである筈がない。にもかかわらず我々の事務所の先住者であり、合意の上で名義変更をせずに引継いで室を借続けたという、たまたまの偶然から彼の名前をビラの連絡先として一度だけ使用した事が、彼と我々の関係を権力が捏造した唯一の根拠であり、攻撃理由とし、数十名の任意出頭とフラクションの切崩し、押収物品のデッチアゲを計り、これまた無関係も甚だしい鉄仮面を引ずり出し、現代のドンキホーテとしてカリカチュアライズし、名古屋における無政府主義運動の威信を

失墜せしめようとしたのだ。我々は現在どれ程力量が小さくとも、かかる権力の策動によって駆逐されるような脆弱な主体ではない。すべての無政府主義戦士は、かかる権力の策動を凡ゆる領域で個別撃破し、漆黒の烽火を挙げよ。
(伊東章好、名城大学無政府主義研究会)

×

人権無視の国籍移転

十月三日の新聞に「台湾人が日本に帰化する場合、九月二十九日以前に国府から国籍離脱の証明を貰っていれば無国籍者として帰化条約に問題がない限り帰化を許可するが、さもない時は中華人民共和国との関連を検討する必要がある」という法務大臣の談話が載っている。

これは要するに、台湾人の国籍は既に中華民国から中華人民共和国に変わったという事であり、これを変えたのは日本政府に外ならず、かかる措置の事前公告はしなかったが、一部の在日台湾人は秘密通告を受けて日本に帰化できる条件を整えた。だから秘密取引の道を知らなかった台湾人は、今や中華人民共和国の国民であり、同国の許可がない限り国籍を変更できない事になったという

のである。

世界人権宣言第十五条には、「何人もほしいままに、その国籍を奪われ、その国籍を変更する権利を否認される事はない」と明記されており、日本国憲法は人権尊重を謳っているのに、その日本政府によって台湾人は何度も国籍を奪われ、権利を否認されたのである。

明治二八年の日本帝国主義の政治家ですらも、台湾を支配するに当って「日本の支配を好まない者は、二年以内に財産を整理して島外に移住してよい」と布告して、国籍選択の自由を認めた。民主主義の日本の政治家が台湾人国籍を一方的に変更し、台湾人に自由選択の権利を認めないと公言するとは、一体どうなっているのだろう。

マスコミは、これは前向きの姿勢と称讃しているが、日中両大国が仲よく少数民族を処分する事が、なぜ前向きで、どこに前進していくのだろうか。

ヒットラーとスターリンがポーランドを処分した結果が世界大戦であった事を思う時、台湾処分で日中友好を謳歌する姿勢の行先は、まことに憂慮にたえないが、将来の事はかりでなく、日中西国の条約によって一方的に国籍を決定された為に、台湾人は日本軍人として何万人も戦場で生命を落し、戦後は日本居住すら条件をつけられ、中華民国の国民にされて叛乱罪の名に於て更に十万

の生命を奪われたのである。今後また中華人民共和国の支配下に入れられたら、また同じ惨事がくり返されない保証があるのか。日本人は台湾人の歴史を知らず、台湾人の問題に口を出すのは中国の内政干渉になるというのが、内政干渉の名に於て人権を無視するのは国家権力の横暴であり、日本政府が台湾人の国籍を何度も変更する事こそ台湾人の人権無視であり、内政干渉ではないか。日本人は日本政府のこの人権無視、内政干渉を止めさせるべきではないか。自国政府の犯罪を放置して、世界の平和を叫んでも何の効果も上らないのではないか。

×

(林 景明)

長野共同新聞発行にあたっての前口上

『長野共同新聞』について考える時私たちににとって必要なのは、キラビヤカに飾られた文面ではなく、問題は、その精神であり思想性である。自分にも分らないような駄文をダラダラと綴るのではなく、一言で相手の魂を震わせる言葉が必要なのだ。そうであるならば、それがたとえ一行の詩であっていいわけだ。

人は何も、物ごとを認識して、やらねばならないから起ち上がるわけではない。私たちには、自由であったと言われる遠い昔の社会の記憶が、とだえることなく下意识となつて流れている。そして、常に自分を自分として

実現し、それぞれが社会的な存在として相互に協力し合っている。だがそれは、この国家制社会にあっては、全てが疎外された似非的なものとして実現せざるをえなく、その逆説が存在の飢えとなつて私たちをおそい、革命へと私たちを起ち上がらせるのである。

今私たちに必要なのは、この人間存在の暗やみのなかから滲み出る言葉である。それは、各個において深く追求されている思想の豊かな実を、独自の表出として言葉化したものであり、暗黙のうちに私たちの行動への衝動をさそうものであるはずだ。このようなものであつて、はじめて言葉は生きてくる。言葉は毒をほらみ、国家にとって危険性を帯びてくる。過去において、幾多の文学者や詩人、あるいは思想家が国家権力により弾圧されたり、自らの生命を断つていったことは歴史に生々しいがそれはこの証左であり、彼らの綴る言葉が国家の根本存在を覆す革命Vだったからである。

かつて六〇年代後半の闘争において、たとえば八十一月決戦Vと銘打って、非常に過激な、あるいは精神主義的な言辞がバルタイの新聞や雑誌に氾濫した。しかしそれは、政治のための言葉であり、今述べた回路を持ちえなかった故に曰々しく何の意味も今日へ残してはいない

のだ。それは今も変わることなく、あの連合赤軍の八戦士V諸君の牢獄での風化ぶりがそれを示している。

しかし一方では、いかにも実存の奥深くから滲み出たような言葉もはかれている。たとえば八人間性の回復V・八自己権力の奪還Vあるいは八疎外感、虚無感からの脱出Vとさかんに言われた。これによると、何か人間にとって、たとえば八人間性Vという既にでき上がった既製なもの・本質的なものがありそれが国家権力により疎外され略奪されているから取り戻さなければならぬと認識されがちである。しかし、そうではないのだ。私たちは、それだけでは舌たらずであることを知らなければならぬ。

私たちの存在を八非在Vとみる考え方がるように、既製なもの、本質的なものなんてありえないのだ。もし、そのようなものがあるとすれば、それは国家を徹底的に否定し破壊しつくすなから新たなものを生み出していく社会的な創造活動の過程にしかないのである。

虚無であれ疎外であれ、それをも呑み込んで自らの在り方を自らの手にゆだねていくというこの革命のロマンチズムが決定的に欠如していたために、八闘争の原点を見失ったVとか、八やはり党は必要だVとグチを言いながら多くの仲間たちが私たちの戦線を去っていったので

ある。私たちの周囲を見わたしても、わが身と思想を安全なところにおきながら、ちんまりと左翼的ポーズにひ

たっている者や、八党Vというミニ国家のなかですくわ

れてしまっている人たちがあまりに多いではないか。

私たちの進まなければならない道は既に明らかである。目指さなければならぬのは、カメレオンのごとく変る政治党派のスローガンの彼方へではなく、たとえば彼らの日常の生活が八死Vをはらんでいた八サッコ・ヴァンゼッティ事件Vの二人の死刑囚の、その八生活Vの意味の奥深くへである。そうでなくては、八過激Vがさらなる完全へと思想を結晶化させていくのではなく、みじめな風化させていくのではなく、みじめな風化をさらけ出す連合赤軍の八戦士Vたちの八死Vを含めた闘いはあまりにも無意味であるからだ。

しかし、正しくは、私たちの焦点はあたかも逆行しつつ接近するようなこの両者の交点へと合わされなければならぬ、と言ひべきであらうと思う。

長野市高田中村沖三の三守田荘

長野共同新聞社

購読料一年(十二回)五〇〇円

× × ×

月刊ギブツ、11・12合併号

共同体運動を着実に推進している本誌は、向井孝君の共同体概論ノートを掲載している。これは「次に続く八家Vと八共同体Vを加えて篇となるものであると断つてあるが、向井君の考え方は大体出ているものとしてよいだろう。そして気のついたことを少しばかり書かしてもらふことにする。

学園闘争や安保闘争の挫折で、多くの青年たちが共同体運動に眼を向けたことは事実であり、既存の共同体を歴訪して安易にそこで落付くものがあるのも事実だろう。また既存の共同体がほとんど宗教団体的な傾向を持っていて、共同体としての論理が不在だということも事実である。そこに向井君が非暴力直接行動にもとづく闘争共同体を提唱するものと思われる。

君のこうした意図には共感するのだが、君が(国家の人民支配は、日常において非暴力的仮装を完璧することと貫徹される。それは単に人民に八暴力政治を意識させないVだけでなく、みちがえるような質的転換による姿貌をとげてあらわれる。すなわち民主主義法治国として、人民が合意し、参加する仕組による合法的な秩序維持―疑似非暴力体制である)という資本主義国家の、資本の

論理を根底的にくつがえす（私有財産制）の実践的否定に共同体の論理がどう結びつくか。これを質問したいのだ。というのは、この資本主義社会で曲りなりにも共同体として存在するということは、法的にも経済的にも、外部的であるとは言え、資本主義国家、あるいは共産主義国家の規制を受けざるを得ないからだ。その中で君の言う生産を行なうとしたら、結局商品生産とならざるを得ない。ヤマギシ会もこの資本主義的商品生産をやることによって貨幣を得て運営している。貨幣を得るためには商魂も不可欠だし、その組合員の生活維持のための生産物と貨幣配分も政治的、経済的に考えねばならない。そうした経営の彼方に「革命」という神話が登場する。

僕は労働組合運動を否定しないと同様に共同体運動を否定する者ではない。否定しないどころか、その必要を信じているのだが、労働組合運動が「革命」的運動としては限界を持つものであるように、共同体運動もまた一つの限界を持つものだと考えている。共同体運動の論理とは、結局こうした限界を予想してのものとなるのではないか。君の言う個人的内面の変革、まず精神革命から、ということは、こうした限界において安易に妥協せずに、論理をつらぬくために要求されるものであらうと考えられる。

過去においてアナリストは労働組合運動が日常闘争に埋没して、労働組合屋や階級闘争屋になること、資本家階級に妥協して御用組合になったり、政治屋の手先になって躍らされることに警告して来た。しかし結局において労働組合は労働貴族化した上層労働者の待遇改善団体となって体制に密着し、革命的目標を失った。

共同体運動の担い手は、過去の貧困にあえいだ労働者階級といった特定階級ではなく、社会的矛盾を克服して未来を建設しようとする、主として若い人たちである。反逆の熱情を建設、創造に打ちこんでも、前述したように生産物も商品化せざるを得ない。日常性埋没の危険も常に在る。それをつらぬく論理が要求されるだろう。

× × ×
やけぼっくり

大阪の杉原君が72年9月10日第3版として出したもので、その冒頭に、「爆弾闘争」「無差別ゲリラ」がマスコミを賑わす。また「暴動闘争」が呼号されたりもしている。だが例えば「爆弾」はせいぜい散発的に使われる程度である。その意味においても「爆弾時代」は、セクトのかけ声か国家のマスキャンペーンのリズムになっても、今の状況をそう称するには価しない。だが、そう称するには価しないからといって、「爆弾」ナンセンスといっ

て手をこまねていることは許されない。・・・スケジュール消化的なカンパニア、観念のみに先走った突出行動、逃避となってしまう共同づくりなどが、いずれも切り込めないでいるとき、ぼくらは一体なにをどのようにやればいいのか。と質問し、非暴力直接行動を打出している。（大阪市旭区高殿郵便局留置杉原哲生）

× × ×

× × ×

草階俊雄君たちのリベルテが「空間」と合同して出した雑誌でバランカはスペイン語のテコの意味だそうだ。無名性の志向、詩作が自分の生活を確証しきたえるメモとなっていて、と同時に、詩に美しいすがたを求めること、それから、それぞれ遠くはなれた土地に点在するなかまの不思議な熱い連帯関係。両誌は合同すべき運命にあったと思います、と語る。詩を通じてこの人たちの心やさしさが感じられる。（秋田市將軍野南一丁目10-18草階方バランカ社、送料共一〇〇円）

× × ×

魚と稲の民・漁民通信瓦版版3

電力需要がふえたというが、産業用に75%使っており、電気料金は一般使用が産業用に比して2.5%も高く料金総

収入の40%をしめている。こうしたブルジョアジー奉仕のために原子力発電が行われ、北海道、宮城、新潟、石川、愛媛その他の諸県で、漁民たちが反対運動に立上っている。熱排水、死の灰の処理、故障の時の保障が無いからだ。（東京港区港南4-1517明瞭寮・漁民研究会水産大支部）

× × ×

蘇生・第11号・反選挙・叛文化地帯特集

大友映男君を中心にしたグループから出されている。

12月10日、日大文理に集まろう。反選挙・コミューン連合世界建設に向けて大BeINがあるよ。12月10日は手に愛と夢を持って下高井戸日大文理へ11時ごろから。投票拒否。新たな広場を。といったピラももらった。

そのピラには「12月10日全国で総選挙が行なわれる予定です。国家権力は自からの「隠れ簀」として「選挙」という儀式によって私達をあざむき続けて来ました。たとえ私達一人一人が選挙に棄権したとしても、それは投票不参加者として、彼等の側の論理から一方的に切捨てられて行くばかりです。

私達は何と長い間、役者のいないステージに虚像のみを求めて花束を投げ続けて来てしまったのでしょいか。代議制そのものの自体が、何等私達を代表するものでな

く、真に自からを代表するものは、自分自身しかないのです。代議制と言いまやかしの上にあぐらをかき続ける権力者と、権力志向者のすべてを私達は認める訳には行かないのです。もはや彼等の用意した擬制の民主主義と、まやかしの選挙への参加を断じて拒否し、当日私達は新たな私達自身の出発を意味する行動をもって、私達自身の存在をつきつけて行きましょう。

そして全国いたるところに自分自身が思いつき、実行し得る行動を準備し、新しい友との出会いを獲得して行きましょう。

その新しい出発こそが旧権力社会を葬り、直に私達の明日を創り上げて行ける第一歩と確信しています。花を持ち、唄をうたい、踊り、街頭をうめつくし、全国に突出させよう。

私達には、国家も、官僚もいらないことを宣言しよう。

あらゆる行動を12月10日17日に向けよう。

(東京都練馬区石神井町一ノ六ノ十波寿美荘大友映男)

リベルテールの集会

火曜サロン

毎週火曜 pm 6 19 時、国鉄水道橋駅近くの喫茶終着駅二階。見栄えのしないおたがいのツラでもつき合わせれば何か話も出ようというもの、詩や原稿の朗読も良い。自由参加、ただしコピー代は自弁のこと。祭日は休み

×

近代学校

大体毎月第三木曜 pm 6 19 時、国鉄池袋東口三越裏、豊命振興会館二階会議室、会費50円、自由参加、主題はお知らせするから参加希望者はリベルテールの会に住所氏名お知らせ下さい。

同志諸君へ

最近、リベルテールの会にきて、手伝ってくれていた某君が昨年の九月頃の北海道庁爆破事件で捕えられ、リベルテール関係者もこの十二月二十六日にいっせいの捜査をうけた。某君が会へ顔を出しはじめたのは、本年の六月以降のことで、それまでは一面識もなかったものであり、

のような権力によるまったくの不当弾圧にわれわれはここに抗議する。

リベルテールの会は終始、非暴力の立場を貫き、会員諸氏の支持を受けてきた。今後共会の立場と活動は不変であり継続されよう。読者諸氏におかれても身辺を清潔にして、無用なちようはつに乗ぜられぬよう充分注意していただきたい。

く、真に自からを代表するもの
です。代議制と言うまやかしの
権力者と、権力志向者のすべて
かないのです。もはや彼等の用
まやかしの選挙への参加を断じ
らたな私達自身の出発を意味す
身の存在をつきつけて行きまし
そして全国いたるところに自
し得る行動を準備し、新らしい
行きましょう。

その新しい出発こそが旧権力
明日を創り上げて行ける第一歩
持ち、唄をうたい、踊り、街頭
出させよう。

私達には、国家も、官僚もい
あらゆる行動を12月10日17日
(東京都練馬区石神井町一ノ六

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和47年12月15日発行 Vo. IV No. 1

編集兼発行者 三 浦 精 一

発 行 所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)

喫茶終着駅
き合わせれ
読も良い。
祭日は休み

河口三越裏、
加、主題は
の会に住所